

## 第二章 夕霧の物語 柏木遺愛の笛

[第一段 夕霧、一条宮邸を訪問]

大将の君は(大将の源君は)、かの今はのとちめにとどめし\*一言を(かの故大納言が今はの際に言い残した一言を)、心ひとつに思ひ出でつつ(誰に相談するでもなく、自分の心一つに思い出して)、「いかなりしことぞ(藤君が父上に不興を買っていたというのは、どういうことなんですか)」とは、いと聞こえまほしう(と是非お聞き申したく)、御けしきもゆかしきを(殿の御様子が知っていたが)、\*「ひとこと」と言えば、故大納言の最期の願いである「亡からむ後ろにも、この勘事許されたらむなむ、御徳にはべるべき」(柏木巻二章三段)という言葉になりそうだが、その「勘事」の中身は曰く言い難い事情だと、憔悴した身を以て示した藤君の心情を汲んで、源君は<宮との密通らしい>と当たりを付けたが、それだけに殿には聞き出し難い、容易に切り出せない話題ではある訳だ。

ほの心得て思ひ寄らるることもあれば(源君には思い当たる事情として藤君と宮との密通があるので)、なかなかうち出でて聞こえむもかたはらいたくて(却って切り出すのも気まずくて)、「いかならむついでに(どういう機会に)、この事の詳しきありさまも明きらめ(この事の詳しい事情を明らかにして)、また(また一方で)、かの人の思ひ入りたりしさまをも聞こしめさむ(藤君がそれをどれほど気に病んでいたかをお伝え申したい)」と、思ひわたりたまふ(と考え続けなさいます)。

\*秋の夕べのものあはれなるに(秋の夕べの物寂しい日に)、一条の宮を思ひやりきこえたまひて(一条の宮を思い遣り申しなさって)、渡りたまへり(源君はお出掛けなさいました)。\*「秋」の話題だ。若君の話題が春二月だったので半年くらい話が飛ぶ。

うちとけ(宮はくつろいで)、しめやかに(落ち着いた曲の)、御琴どもなど弾きたまふほどなるべし(絃合奏をなさっているところのようでした)\*深くもえ取りやらで(ゆっくりと片付けることも出来ず)、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり(そのままその合奏をしていた南の廂に大将をご案内申しなさいました)。端つ方なりける人の(最後になった女房が)、みざり入りつるけはひどもしるく(奥へ膝を進めて下がる気配がはっきり分かって)、衣の音なひも(衣擦れの音や)、おほかたの匂ひ香うばしく(残り香が辺りに漂って)、心にくきほどなり(華やいだ風情です)。\*「深し」は<浅薄でない。かりそめでない。>ともあるので、じっくりきちんと、みたいなことだろうか。何故此处で「深し」という語を使うのか、分かり難い。「取り遣る」は<取り除く。かたづける。>と大辞林にある。楽器の片付けのことなのか、応接の準備なのか、両方なのか、分からない。

例の、御息所、対面したまひて(いつものように御息所が応対なさって)、昔の物語ども聞こえ交はしたまふ(故大納言の昔話などを話し合いなさいます)。わが御殿の(源君の三条邸は)、明け暮れ人しげくて、もの騒がしく(日々人の出入りが多くて物騒がしく)、幼き君たちなど、\*すだきあわてたまふにならひたまひて(幼い子供たちが集まって慌しくしていらっしやるのに馴れていらして)、いと静かにもものあはれなり(この宮邸はとても静かで物寂しい)。うち荒れたる心地すれど(手入れが行き届いていない感じもするが)、あてに気高く住みなしたまひて(上品で誇り高いお暮らしぶり)、前栽の花ども(前庭の花々が)、虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを(虫

の音が多く聞こえる野辺のように咲き乱れている夕映えの風情を)、見わたしたまふ(見渡しなさいます)。 \*「すだく」は「集く」と表記され多く集まる。群がる。>と古語辞典にある。

## [第二段 柏木遺愛の琴を弾く]

和琴を引き寄せたまへれば(大将が近くに出されたままの和琴を引き寄せなさいると)、\*律に調べられて(律音階に調弦されていて)、いとよく弾きならしたる(とてもよく使い込まれていて)、人香にしみて(女房衣装の焚き香が染みて)、なつかしうおぼゆ(手に馴染む気がします)。 \*「律(りち)」は<秋に相応しい調べ。>と注にある。多弦楽器はおよそ調性楽器で、理論で遊ぶ移調奏法などが邪道に過ぎない精神性に於いての音制御を試みる音曲として、合奏の基礎を成していたであろう曲ごとの音階が、ある程度の員数と時間を経て共通認識されたものとして形作られた曲調に合わせて、各弦の音程に調弦されるのだろう。特に、六弦和琴は拍子取りの流し弾きが主な奏法だったらしい記事はこの物語にもあって、身近な楽器で想像すれば、オープンチューニングのギターでタイミング命の開放弦弾きをするみたいな感じ。で、その調弦だが、「律旋法」は大辞泉に<日本音楽の理論上の音階の一。宮・商・角・徴(ち)・羽(う)の五声に嬰商(えいしょう)・嬰羽の2音を加えた律の七声のこと。相対的音程関係はレ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの形になる。雅楽に用いられる音階。律旋。律。>とあって、ギターに準えるとDm6だ。因みに「呂旋法」は<中国および日本音楽の理論上の音階の一。宮・商・角・徴(ち)・羽(う)の五声に変徴・変宮の2音を加えた呂の七声のこと。相対的音程関係はソ・ラ・シ・ド・レ・ミ・ファの形になる。雅楽の基本的音階とされてきたが、現在の雅楽の奏法にはほとんど用いられない。呂旋。呂。>とあって、これはG7(sus4)。

「かやうなるあたりに(こういう男心をそそるところでは)、思ひのままなる好き心ある人は(奔放な女遊びをする人は)、静むることなくて(気取ってなどいられずに)、さま悪しきけはひをもあらはし(無体に及んで)、さるまじき名をも立つるぞかし(下品な男という汚名を立てることに)なるんだらうな)」

など(などと宮を手籠めにする荒々しさを楽しく)、思ひ続けつつ(想像しながら)、\*掻き鳴らしたまふ(大将は良く鳴く和琴を抱くように掻き鳴らしなさいます)。 \*「掻く」は<弦楽器を爪弾く>であり、「掻き鳴らす」は<全体に大きく弾く>という奏法を示したりもする。と同時に、「掻く」は<手で作用させる=引き寄せる、押し退ける>という語意があり、カ音の自己言動を客体視する意識を示す語感から、「掻き鳴らす」は<対象を抱いて鳴かせる自分を想定する>という意味も漂わす。そういうイヤラシイ雰囲気を出しているのが「なつかしうおぼゆ」という言い方だ。その上で、「好き心ある人は~さるまじき名をも立つるぞかし」とまで、内心文とはいえ作者は言葉に表わしているのだから、是は示唆と言うよりは、大将が和琴を宮に見立ててその抱き心地を夢見ていることの明示文であり、左様に補語する。

故君の常に弾きたまひし\*琴なりけり(この和琴は故大納言の君がいつもお弾きになっていた琴なのでした)。をかしき手一つなど(大将は風情のある曲を一つ二つ)、すこし弾きたまひて(少しお弾きになって)、 \*「琴なりけり」の「琴」は勿論、大将が引き寄せた和琴だが、上文でその和琴は大将の頭の中では宮の代替品となっていることを示した上で、わざわざ「故君の常に弾きたまひし」という説明を此処で持ち出した作者の意図は、大将は内心で<藤君が宮を可愛がっていた情事を想像している>ということを読者に示す以外の何ものでもない。此処の文はモロ、エロ本だ。

「あはれ(ああ故君は)、いとめづらかなる音に掻き鳴らしたまひしはや(さぞ素晴らしい音でこの和琴をお弾きになっていたんでしょね)。この\*御琴にも籠もりてはべらむかし(こちらの主の宮の御琴にも故君の思は宿っているに違いない)。承りあらはしてしがな(お聞かせ頂きたいものだ)」 \*「おほんこと」の「御」は、御息所に語る表向きの意味としては故大納言愛用の立派な楽器に対する敬称だろうが、源君の内心では宮に対する敬意を複意する。なので、「この」は<大将のこの手許の>という意味と、宮に対する<この家の=こちら主の>という意味を複意する。御息所に話す表意ではそれとなくだが、読者には大将の内心が明かされているので、大将は「籠もりてはべらむかし」という言い方ではっきりと宮に、あなたは藤君の体の味を覚えているでしょう、と言っているのであり、「承りあらはしてしがな」は、それがどんな感じだったか聞かせて下さい、と言っているし、私にもあなたを抱かせてください、の意も籠もる。此処に拘らないと、当時の読者が読んでいたエロ本の味わいを見逃す。

とのたまへば(と仰ると)、

「\*琴の緒絶えにし後より(良き理解者であった夫を失ってから)、昔の御童遊びの名残をだに(宮は子供の頃に練習した簡単な曲でさえ)、思ひ出でたまはずなむなりにてはべめる(思い出し為さらないように成っておりますよ)。 \*「琴の緒絶えにし」は注に<以下「見たまふる」まで、一条御息所の詞。伯牙絶絃の故事(呂氏春秋・蒙求)。和琴の名手柏木が亡くなって以来、の意。「亡き人は訪れもせで琴の緒を絶ちし月日ぞかへり来にける」(蜻蛉日記)。>とある。「絶絃(ぜつげん)」は<《中国で、琴の名手伯牙(はくが)が、自分の琴をよく理解していた鍾子期(しょうしき)が死ぬと、琴の弦を断ち切って二度と琴を弾かなかったという「呂氏春秋」本味の故事から》愛用の琴の弦を断つこと。転じて、親しい人と死別すること。また、なれ親しんだ物事や人と決別すること。>と大辞泉にある。「蜻蛉日記」は<日記。三卷。藤原道綱母作。977年成立か。藤原兼家との結婚に始まり、夫との不和、子への愛情など21年間の生活をつづる。女性の筆になる最初の日記文学。>と大辞林にある。この和歌の「琴の緒を絶ちし」も「絶絃」の故事を踏まえた言い方で、紫式部もそれに習った、という意味の注だろうか。分かり難い歌で、すこしWeb検索すると「蜻蛉日記」の関連ブログに、この歌は作者の母の一周忌に、良き理解者だった母を偲んで不謹慎ながら琴を弾いた作者が、却って理解者を失った悲しみを深くする、という趣との話が掲載されていた。「琴の緒を絶ちし月日ぞ」は<母の命日>を意味するようだ。ということは、少し意外だが、故大納言が琴の名手、という意味ではなくて、宮が琴の名手で、故大納言はその良き理解者、という意味に成るようだ。尤も、此処での話題は、社会的評価としての名手ではなく、夫婦としての良き理解者という意味で、夫を亡くして宮が琴を弾く張り合いを失った、という主旨だから、その辺の厳密さは重要ではなのだろう。

院の御前にて(父朱雀院の御前にて)、女宮たちのとりどりの御琴ども(内親王たちが各自いろいろな弦楽器を)、試みきこえたまひしにも(おさらいでお聞かせ申し上げなされたときにも)、かやうの方は(宮は音楽の才が有るのが)、\*おぼめかしからずものしたまふとなむ(はっきり分かるようであらうとのように)、\*定めきこえたまふめりしを(お歴々がご評価申しなされたようなのを)、あらぬさまにほればれしうなりて(今は別人のようにぼんやりなされて)、眺め過ぐしたまふめれば(物思いに沈んでいらっしやるようなので)、世の憂き\*つまにといふやうになむ見たまふる(琴を弾くのが夫を思い出すことに繋がって、宮が世を憂う絃口になるように思えます)」 \*「おぼめかし」は<はっきり見えない。おぼろげである。>と大辞泉にある。おぼろめく、おぼろげめいた、という言い方のようだ。 \*「定めきこえたまふめりし」は注に<主語は判然としないが、朱雀院御前の高貴な方々であろう。>とある。確かに朱雀院に対する敬語にしては不十分のようで、試楽の場での評価、ということら

しい。\*「つま」はく物事のいとぐち。てがかり。端緒。>と大辞泉にある。この「世の憂きつまにといふやうに」は蜻蛉日記の和歌を下敷きにした物言いに見える。

と聞こえたまへば(と御息所がお応え申しなさると)、

「いとことわりの御思ひなりや(それは尤もな宮の御傷心なのでしょう)。\*限りだにある(尽きせぬ思いではお辛いでしょう)」 \*「限りだにある」はく「恋しさの限りだにある世なりせば年へてものは思はざらまし」(古今六帖五、二五七一、坂上是則)を引く。>と注にある。恋しい気持ちに決まった分量が有るなら、何年か経てば無くなるのに、みたいな理屈が立った歌。しかし、現実には理屈が通らずに、いつまでも慕情に苦しむ、というのは一つの典型的な悲恋の詠み方ではありそうだが、そして、それを実感する人もいるのだろうが、それだけに、是を客観的に、更に言えば傍観者の立場で言う時は、早く別の恋をすれば良いのに、という突き放した気分や、ましてや大将の様に其処に付け入ろうとしているなら、世の中は限りこそが有るんだ、と迫っ突いているような言い方にも成りそうだ。まあ、表向きは同情だろうが。

と(と大将は)、うち眺めて(直ぐには話が進展しそうでないと、様子眺めに入って)、琴は押しやりたまへれば(和琴を手離しなさると)、

「\*かれ(その和琴に故大納言の思いが籠もっているという御話が)、なほさらば(本当ならば尚いっそう)、声に伝はることもやと(音に現れることも有るか)、聞きわくばかり鳴らさせたまへ(私にも分かるようにもう少しその和琴を弾いてみて下さい)。\*「かれ」は注に<以下「耳をだに明きらめはべらむ」まで、一条御息所の詞。「かれ」は和琴をさす。>とある。が、むしろ「かれ」は、源君が言った「あはれ、いとめづらかなる音に掻き鳴らしたまひしはや。この御琴にも籠もりてはべらむかし。承りあらはしてしがな」を受けていて、「なほさらば」がくもしそうなら、尚一層に>という言い方なのであって、「和琴」は「鳴らさせたまへ」の対象体として省略されている。で、この文を源君の言葉の複意を踏まえて読めば、御息所が女郎屋の遣り手婆に見えてくるように書いてあるのが作者の工夫だ。

ものむつかしう思うたまへ沈める\*耳をだに(思い悩んで暗く沈んだ私の耳でさえも)、明きらめはべらむ(あなたの素晴らしい琴の音で聞き醒まさせて下さい)」 \*「耳をだに明きらめはべらむ」の言い回しは、注に<『完訳』は「仙楽ヲ聴クが如ク耳暫ク明サム」(白氏文集、琵琶引)を指摘。>とある。白楽天の「琵琶行」は前にも引かれていた。左遷された中央官僚の白居易が難にも稀な名手の琵琶に望郷を念を新たに涙する、みたいな詩らしい。

と聞こえたまふを(と御息所は申しなさったが)、

「\*しか伝はる中の緒は(そのように夫の思いが伝わる夫婦仲の縁は)、異にこそははべらめ(特別なものなのです)。それをこそ承らむとは聞こえつれ(その夫婦の情感をこそ故大納言譲りの琴の腕前で宮様に、お聞かせ頂きたいと申し上げているのです)」 \*「しか」の<そのように>の「その」はく故大納言の宮への愛情>。「中の緒(なかのを)」はく楽箏(がくそう)の13弦のうち、第6から第10までの弦。また、和琴(わごん)の6弦のうち第2の弦、琴(きん)の7弦のうち第4の弦。>と大辞泉にある。で、此处では和琴を前にしているので第2弦を指すのかと言えば、それは違う。此处での話題はく故大納言の宮への愛情>であり、

小道具の琴の演奏に掛けた語用で〈夫婦仲の縁(糸、絃)〉のことを「中の緒」と洒落ているのであって、琴の具体的な機能や作用の話ではない。

とて(と言って大将は)、御簾のもと近く押し寄せたまへど(和琴を宮のいらっしゃる母屋の御簾の裾近くに押し遣りなさるが)、とみにしも受けひきたまふまじきことなれば(宮が客人の求めに応じて、そのままその和琴の演奏を引き受けなさる親しさでは無いので)、しひても聞こえたまはず(無理強いは為さいません)。

### [第三段 夕霧、想夫恋を弾く]

月さし出でて曇りなき空に、\*羽うち交はす雁がねも、列を離れぬ(月が明るく出て雲ひとつ無い空に羽を揃えて飛ぶ雁が整然と飛んで行く)。 \*「羽うち交はす雁がねも」は注に〈「白雲に羽うち交はし飛ぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月」(古今集秋上、一九一、読人しらず)による表現。〉とある。「白雲に」と「曇りなき空に」は情景の印象は違う。私見では前者は物寂しく、後者は勇壮だ。「羽打ち交はす」は〈羽を打ち揃えて飛ぶ〉。「交はす」は〈互いに間を取る〉。「列を離れぬ(つらをはなれぬ)」は〈一羽も列を乱さない〉。鳥の群れ飛ぶ光景は、渡り鳥の習性、と言ってしまえばそれまでだが、野生生物が大自然の中で種で生きて行く逞しさと厳しさを感じさせて、ヒトも共感する、のだろう。美しさの本質は生命力だ、と思わせるかのようだ。

うらやましく聞きたまふらむかし(その雁の合鳴きの声を番いの会話と、羨ましくお聞きになったのだろうか)、風肌寒く(人肌恋しく)、ものあはれなるに誘はれて(物寂しさに誘われて)、\*箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも(宮が十三弦琴をごく小さな音で爪弾きなさるのも)、奥深き声なるに(情趣深い響きなので)、いとど心とまり果てて(ますます心が引き付けられて)、なかなか思ほゆれば(興味が掻き立てられたので)、琵琶を取り寄せて(琵琶を所望して)、いとなつかしき音に(とても優しい音色で)、「\*想夫恋」を弾きたまふ(大将は想夫恋という曲をお弾きになります)。 \*「箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへる」は〈主語は落葉宮。〉と注にある。そうなのか、とは思いつつ、此処の時間的推移や呼吸感や間合いみたいなものが良く分からない。「しひても聞こえたまはず」とあったが、宮はそれなりに大将の意を受けて、少し演奏をする気になったのか。だとして、その際に十三弦は大きいので宮が自分で用意するとは思えず、侍女に御前に用意させた、ということだろうか。それとも、先に「深くもえ取りやらで」とあったので、楽器は片付けずに、合奏で弾いていたまま御前に置かれていたのか。でも、いくらなんでも、それは客人を迎える姿勢ではない気がする。ただ、いずれにしても箏の琴は宮の側にあったらしく、宮は合奏を聞いていたのではなく演奏をしていた、ということらしい。となると、御息所が大将に應對した「琴の緒絶えにし後より、昔の御童遊びの名残をだに、思ひ出でたまはずなむなりにてはべめる」という言い方は、あくまで社交儀礼の応答として、宮の演奏を断るための修飾的な言い回しなのであって、あまりその言葉の内容に拘るべきものではない、ということらしい。となると、この場面での遣り取りの、正にその空気感の微妙さを行間から拾うべきもののように思えるが、どうもおぼろめく。 \*「想夫恋(さうふれん)」は〈雅楽の一。左方の新楽で、平調(ひようじょう)の中曲。晋(しん)の大臣王儉が一時失脚し、清廉(せいれん)であることがわかって重任されたのを、泥中の蓮(はす)の花にたとえて作ったという。舞はない。小督局(こごうのつぼね)が演奏して天皇の愛情をしのんだ平家物語中の話で有名。〉と大辞林にある。黒田節の歌詞に出て来る雅楽名。YouTubeに龍笛独奏のアップがあった。それ以上の手掛かりは無いが、琵琶弾きで歌が無いとしたら、実際の演奏の印象はどれほどの興味が有るものなのか。どうも、「想夫恋」という曲名自体の響きと琵琶を抱え弾く大将殿の姿に意味を込めた書き方にしか見えないのは、強ち現代人ゆえの教養の無さによるものでもなさそうだ。

「思ひ及び顔なるは(訳知り顔のような厚かましきは)、かたはらいたけれど(恐縮ですが)、これは(この曲なら)、\*こと問はせたまふべくや(故人を偲ぶ弔いに共感して琴を添い弾きして頂けるかと、存じまして)」 \*「こと問はせたまふべくや」は注に<『集成』は「「こと」に「琴」を掛ける。柏木への追慕から、合奏して頂けるのではないかと、暗にすすめる」。『完訳』は「亡夫を偲んで、その親友に何か言いかけてくれるだろうか」と注す。>とある。「とふ」は「訪ふ」でもあって<弔う=個人の死を悼む>。

とて(と言って大将は)、切に簾の内をそそのかしきこえたまへど(頻りに御簾内の宮を合奏に誘い掛け申しなさるが)、\*まして(大将との相対弾きは普通の合奏以上に)、つつましきさしいらへなれば(気の引ける相伴なので)、宮はただものをのみあはれと思し続けたるに(宮はただ夫への追悼を心の中で思い続けていらしたが)、 \*「まして」は何に比較しているのか。合奏することは気持を合わせることだ。それが式典に向けて大勢で合奏するのは、お披露目に際して鑑賞に堪える演奏をすべく公の目的があるのだが、個人的に、まして相対で合奏するというのは、相手と気心を通じ合うこと自体が楽しみに位置付けられてしまう。つまり、普通の合奏以上に、だ。 \*「差し応へ」は<返事。受け答え。>また<演奏の相手をする。>と大辞泉にある。

「ことに出でて 言はぬも言ふに まさるとは 人に恥ぢたる けしきをぞ見る」(和歌 37-04)

「ことさらに言わぬが花とは感心な」(意識 37-04)

\*注に<夕霧から落葉宮への贈歌。「言」「琴」の掛詞。「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」(古今六帖五、二六四八)を引歌とする。>とある。「人に恥ぢたるけしきをぞ見る」は<傍目に見つともない姿だ>では勿論なく、沈黙は金のあなたに(=「人に」)恥らう慎みの有る(=「恥ぢたる」)手本とすべき姿を(=「けしきをぞ」)見る思いだ(=「見る」)、という感心した言い回し。と言って、厭味でもなく、素直に褒めているのだろう。本当に、「言」と「琴」を掛けた以外に特に含みも捻りも無さそう。まあ幾らかは褒め殺しやら煽って木に登らせる追い込みの趣は有るのだから、歌と言うより洒落で持ち上げたみた台詞、みたいな。

と聞こえたまふに(と大将が冷やかしなさるので)、ただ末つ方をいささか弾きたまふ(宮は終りの方をほんの少しだけお弾きになります。それは丁度こう言い返しなさるかの趣でした)。

「深き夜の あはればかりは 聞きわけど ことより顔に えやは弾きける」(和歌 37-05)

「ことさらに気取ってるんじゃありません」(意識 37-05)

\*注に<落葉宮の返歌。「琴」の語句を受けて返す。「琴」「言」の掛詞。「えやは」反語表現。「ことより顔に」と「弾きける」は大島本の独自異文。他本「ことよりほかに」「いひける」とある。『完訳』は「迷惑な言いがかりと切り返す」と注す。>とある。「深き夜のあはればかりは聞きわけど」は<秋深い夜の故人を偲ぶ情趣は感じますが>ということだろう。で、問題は下句だ。「異より他にえやは言ひける」だと<何も取り立てて言わぬが花という心算じゃありません>だろうか。「ことより顔にえやは弾きける」は<何も気負って弾いたんじゃありません>だろうか。宮は少しばかりでも弾いたのだから、弾いた事を説明するような後者の言い方は違和感がある。私は、「ことよりほかにえやはいひける」と見做したい。それと、そもそもだが、是は宮の返歌なのか。というか、大将の贈歌とされるものも、宮への贈歌というには余りに真心がない。褒め言葉を大喜利の和歌めかして言うことで、冗句までは行かないが幾分は軽口風の味わいに仕立てた機転だったんじゃないだろうか。だから、それは真に受けて返歌

するようなものではなく、正に少し弾くことで応答になっているのであり、それを語り手が和歌めかした言い方で洒落てオチを着けた、ということなんじゃないかな。そう解して、上文を補語する。

飽かずをかきしきほどに(もっと聞きたいほど情趣豊かな)、さるおほどかなるものの音がらに(そのおっとりとした箏の音色は)、古き人の心しめて弾き伝へける(昔の人から心を込めて弾き伝えられている)、同じ調べのものといへど(同じ想夫恋という曲とはいっても)、あはれに心すごきものの(感じ入る印象は格別深かったので)、片端を搔き鳴らして止みたまひぬれば(ほんの少し爪弾いて終わってしまったのが)、恨めしきまでおぼゆれど(残念に思えたが)、

「好き好きしさを(音曲好きなところを)、さまざまにひき出でて\*御覧ぜられぬるかな(和琴や琵琶をいろいろ弾いたりしてお知り頂けた事と思います)。\*「御覧ず」は「見る」の尊敬語で<御覧になる=お知りになる>。お目に掛ける=お知り頂く、は古語で「御覧ぜさす」。見てしまいなさは「見給ふ」。「御覧ぜらる」は、失態などを<お目に掛けてしまった←‘見られてしまった’の尊敬文>ではなく、意図した事を<お知り頂けた>という言い方、かと思う。お目に掛けてしまった、は多分「見給はらる」だ。

秋の夜更かしはべらむも(これ以上に秋の夜更かしを致しますのも)、\*昔の咎めやと憚りてなむ(故人の咎める所となりましようから遠慮して)、まかではべりぬべかめる(退出すべきかと存じます)。\*「昔の咎め」は注に<故人柏木が咎めようかと、の意。「咎めや」の下に「あらむ」などの語句が省略された形。>とある。

またことさらに\*心してなむさぶらふべきを(また改めて演奏を楽しみにして伺いたいので)、この御琴どもの\*調べ変へず待たせたまはむや(これらの楽器はこの調弦のままお待ち頂けませんでしょうか)。\*「心して」は<失礼の無い様に気をつけて>ではなく、「御覧ぜられぬるかな」と自負する「好き好きしさ」を持って、楽しみに再訪したい、という文意かと思う。\*「調べ変へず待たせたまはむや」は注に<『完訳』は「今宵の調べは宮が自分に好意を寄せてくれた証と解し、後日も変らぬ心でいてほしいと懇願する」と注す。>とある。「調べ」が「宮が自分に好意を寄せてくれた証」かどうかはさて置き、「好き好きしさ」の語に自分の宮への懸想を込めていることは確かだろう。

\*弾き違ふこともはべりぬべき世なれば(行き違いも有り得るこの世の中なので)、うしろめたくこそ(変調は心配ですから) \*「弾き違ふ」は注に<『完訳』は「「琴」の縁で「弾き」をひびかす。期待を裏切らぬよう意をこめる」と注す。>とある。「うしろめたくこそ」は<心変わりが心配だ>という意味になることもあるだろうが、この段階では確たる心証までは持ち得ていないのだから、「調べ変へず」を<変調無く→息災で>という一般語用の挨拶に洒落て言ったのだろう、少なくとも表意では。ただ逆に、大将の再来が何時になるかにも拠るが、楽器の調弦がこのまま変わっていなかったら、宮は大将の懸想を受け止めた、という意味に客観的になってしまうので、早々に上手く傷付けない言い訳が立つような理由で調弦を変えておかないと、それはそれで厄介だ。いや、宮が大将を受け入れるならそのまま実質上は何の問題も無いが、それでも調弦を変えないのは幾分と下品な印象だ。受け入れるにしても、一度は上手くはぐらかすぐらいの勿体ぶった焦らしの工夫は、大将だって期待するだろう。

など(などと大将は)、まほにはあらねど(真正面から切り出したわけでは無いが)、うち句はしおきて出でたまふ(宮に恋心を匂わせて帰り掛けなさいます)。

#### [第四段 御息所、夕霧に横笛を贈る]

「今宵の\*御好きには(今宵の大將殿の御趣向は)、\*人許しきこえつべくなむありける(故人もその主旨を良く分かり申したことでしょう)。\*「おほんすき」の「御」は大將殿への尊称。「好き」は<色好み>を言うことが多いが、全般的なく興味本位の言動、物好き、酔狂、粹狂、興趣>を本来は示すようだ。だから、現代語で言う「戯れ」「遊び」あたりが妥当な言い換えになりそうだが、厄介なことに古語での「戯れ」「遊び」は<冗談>や<音楽会>といった狭い対象を示してしまい勝ちで、古文の言い換えにこれらの語は使いにくい。特に、この場合のような微妙な言い回しでは、便利すぎて却って分かり難い語なので、此处では<趣向>として置く。\*「人許しきこえ」の「人」は故大納言。他の誰を想定すべきか。敬語が無いのは、この場に居ない身内の故人を大將に謙遜して言う意味と、婿とは言え王家として臣下身分の者に軽々に敬語を使わない意識があるのかも知れない。「許す」は<緩く大目に見る>と言うよりは、此处では<不謹慎に当たらないと見る=趣旨を理解する>という狭い意味での語用だろう。

そこはかとなきいにしへ語りにのみ紛らはさせたまひて(取り留めも無く故人が音曲好きだったという昔話をなさっただけで)、\*玉の緒にせむ心地もしはべらぬ(故人を偲ぶにはまだ物足りない気にもなってしまうので)、残り多くなむ(続きをもっとお聞きしたいものです)」 \*「玉の緒にせむ」の言い回しは、注に<「玉の緒」は延命の意。また「琴」の縁語。「片糸をこなたかなたに縊りかけてあはずは何を玉の緒にせむ」(古今集恋一、四八三、読人しらず)を踏まえる。>とある。「片糸(かたいと)」は<2本の糸をより合わせて1本にするときの、その片方の糸。多く片思い、弱い、はかないの意をこめて使われる。片緒。>と大辞泉にある。尤も、「撚る」事自体は一本の糸でも出来るが、「よりかく(撚り掛く)」の「掛く」は<他者に作用する>ことを示すので、正に「こなたかなたに」の二本の糸でなければ捻じれない。絡み合う情事を思わせる語感。「玉の緒」は、一つは正に<数珠玉を通す糸=故人への追悼>であり、「何をせむ」は<その役に立たない>という理筋を文意する。で、もう一つは<偶の縁=貴重な出会い>であり、「何をせむ」は<その甲斐が無い>を複意し、文意は<情交出来なければ折角会った甲斐が無い>という色っぽさ。作者がこの「玉の緒にせむ」という言い方に大將と宮との遣り取りに色事めいた趣を添えていることは間違い無く、御息所に遣り手婆の滑稽さを重ねようとするかの工夫も汲むとしても、またそれだけに、御息所がどういう心算で言ったのか、は注意が必要で、当時の読者がこの言い回しの表意を如何読んだのかが分からないと、この文の洒落っ気を味わえない。つまり、古今集の歌の色っぽさは当時の人の常識として、その上で、この「玉の緒にせむ」を人々はどのように日常語用していたのか、を推理する訳で、それが<延命の意>というのには違和感がある。と言っても、一般語用であれば、相当に幅広い大雑把な意味でなければウカツに使えない。となると、「情交」自体の意味は省きながらも、そのくだけた雰囲気だけは借りて<折角なのに中途半端で物足りない→面白そうな話だから続きが聞きたい>くらいの意味の言い回しで使われた、もののように考えられそうだ。

とて(と言って御息所は)、御贈り物に笛を添へてたてまつりたまふ(御みやげ物に笛を添えて大將に差し上げ申しなさいます)。

「これになむ(この笛には)、まことに古きことも伝はるべく聞きおきはべりしを(大変に古い由緒が有るものと聞いておりましたが)、かかる蓬生に埋もるるもあはれに\*見たまふるを(こうした蓬が生い茂った寂れた所に埋もれているのも残念に思われますので)、\*御前駆に競はむ声なむ(晴れやかな軍隊行進の公式舞台で鳴響くのを)、よそながらもいぶかしうはべる(よそながらも漏れ聞きたく存じます)」 \*「見たまふる」は、「見る(見立てる、思う)」の連用形「み」に、会話でだけ使

われる丁寧表現の補助動詞「たまふ」の連体形が付いた言い方。従って、接続助詞「を」は体言を受けた理由説明の<～というものなので>という言い方。\*「御前駆に競はむ声なむ」という言い方が笛の音の形容として如何いう意図を持っているのか分かり難い。「さきをきそはむ」は<先を競う>とも聞こえて、その闘争心の<威勢の良さ>を思ったりもするが、いくら近衛大将だからって、軍隊ラッパじゃあるまいし、それじゃ情緒に欠ける気がする。では、何を先追いと張り合おうというのか。先追いと言えば、やはり良く通る声、それも出来れば上品な大声ではなく、張りのある澄んだ声、例えば童部のような邪念の無い高い周波数あたりが望ましいのだろう。と言って、単調さは頂けないだろうが、「よそながらも(遠くからでも)」に対比される意味合いからしても、遠くまで届く<良く通る音>が意図された言い方ではあるらしい。あとは、「御前駆(おほんさき)」を引き合いに出す御息所の生活感や価値観を如何見るかだが、「蓬生に埋もるるもあはれ」と思う権勢志向からして、衛門督から近衛大将へ橋掛ける気分で武官衛士の心意気に期待した、みたいなことと思って置く。となると、それはやはり<威勢の良さ、元気の良さ>なのかも知れない。

と聞こえたまへば(と御息所が申しなさると)、

「似つかはしからぬ隨身にこそははべるべけれ(私などはとてもその任に、力及ばない衛士ではございますが)」

とて(と大将は謙遜して見せて)、見たまふに(その笛を御覧になると)、これもげに世とともに身に添へてもてあそびつつ(これも確かに故衛門督がいつも持ち歩いて吹いては)、

「みづからも(私にも)、さらにこれが音の限りは(これ以上はこの笛の全てを引き出すほどは)、え吹きとほさず(吹き切れない)。\*思はむ人にかで伝えてしがな(それを託せる人にどうにかして伝えたいものだ)」 \*「思はむ」の「む」は<見込む、見込める>という予想や願望を示す助動詞で、此处での「思ふ」こととは、「音の限り」を「吹きとほす」という、その笛を持つ者が負うべき使命感だから、その資質を他に見込むことは<託す>と言う。

と、をりをり\*聞こえごちたまひしを思ひ出でたまふに(と時々言い触らしていらした事を大将は思い出しなさって)、今すこしあはれ多く添ひて(帰り際ながら一入感じ入って)、試みに吹き鳴らす(試しに吹いてみるに、)。\*盤渉調の半らばかり吹きさして(盤渉調を半分くらい吹いて止めると)、 \*「聞こえごつ」の「ごつ」は<ごとす、事す、言す>の約の接尾語と古語辞典にあり、「聞こえごつ」は<聞こえるように言う→わざと言いつつ→決まり文句のように言う>ような感じだろうか。 \*「盤渉調(ばんしきでう)」は盤渉という音名を基音とした曲調および音階のような説明が多いが、此处では「なからばかり(半分ほど)」とあるから、その代表的な曲を具体的に当時の人は思い描いたのだろうが、私には雲をつかむ話だ。盤渉は西洋音名のB音に近く、盤渉調はBm音階に近い、との説明も幾つかのサイトにあるが、YouTubeで雅音会の盤渉調越殿楽の演奏動画の見聞きした所ではB♭2やF4みたいな和音だった。まあ分からない。

「昔を偲ぶ\*独り言は(故人を偲ぶ琴の一人弾きは)、さても罪許されはべりけり(それでも独り言ゆえの罪の無さに無礼も許されるでしょうが、)。これはまばゆくなむ(この笛を吹くのは恐れ多くて気が引けます)」 \*「ひとりごと」は<「独り言」と「独り琴」との掛詞的表現。>と注にある。

とて(と言って)、出でたまふに(廂の御簾内から縁側にお出になると)、

「露しげき むぐらの宿に いにしへの 秋に変はらぬ 虫の声かな」(和歌 37-06)

「あばら家に昔ながらの虫の声」(意識 37-06)

\*対象の笛の音を「虫の声」のように聞いた、というのは褒め言葉なのだろうか。「虫の声かな」の「かな」はく～のようだ>またはく～のようで感じ入る>という自分の感想を示しているのであって、対象の評価は当然に間接的には好ましいものと示唆はしているだろうが、直接にその評価を主旨としていない言い方に思う。この歌は、詠み方としてはく夫を失って涙に暮れる寂れたこの宿に往時の秋に変わらぬ虫の声が懐かしい>と言い放して、大将の笛の音は、それを邪魔していない、という最低線から、その興趣を非常に誘う、という最高線まで、それは各自の受け止め次第だという幅を持たせたままの味わいになっている。勿論、この場のこの時点で贈歌する御息所の評価は最高線を意味するに違いないが、この場の、特に宮の心情に於いても、最低線には適っている、という愛想になっているらしいところがミソじゃないかな。

と(と御息所が)、聞こえ出だしたまへり(和歌を贈り申し出しなさいました)。

「横笛の 調べはことに 変はらぬを むなしくなりし 音こそ尽きせね」(和歌 37-07)

「楽しんで同じ歌ほど泣けてくる」(意識 37-07)

\*「横笛の調べ」はく横笛の音色>ではない。下旬に「音こそ尽きせね」とあるのに、上句でく音色>が「ことに変はらぬを」と言っているとしたら、その歌筋の稚拙さは「むなしくなりし」の興趣を損なう。「横笛の調べ」は「盤渉調の半らばかり」と語られた曲だ。曲だから、「ことに」が「殊に」と「琴に」の掛詞になる。音色なら、笛と琴が「変はらぬ」ワケはない。「むなしくなりしねこそつきせね」は「空しくなりし根こそ尽きせね」がく持ち主が死んで笛が落着き先を見失った>。「虚しくなりし音こそ尽きせね」がく悲しくて鳴き声が止まらない>とくつまらない演奏が長々と終わりませんで>。表意はく横笛も琴と同じ曲ですが詰まらない演奏で長々と失礼しました>と謙遜の挨拶。真意が意識の通りだとすると、出来過ぎた曲解だろうか。

出でがてにやすらひたまふに(帰りがけに大将は故衛門督の哀惜の念に浸りなされたので)、夜もいたく更けにけり(夜もすっかり更けてしまいました)。

[第五段 帰宅して、故人を想う]

殿に帰りたまへれば(大将が自宅へお帰りになってみると)、格子など下ろさせて(夫人は蔀格子を下ろさせて戸締りなさせて)、皆寝たまひにけり(家族は皆お寝みになっていました)。

「この宮に心かけきこえたまひて(大将はこの未亡人の一条宮に気がお有りで)、かくねむごろがり聞こえたまふぞ(このように熱心にご訪問なされるのだ)」

など、人の聞こえ知らせければ(などと女房が夫人にお知らせ申したので)、かやうに夜更かしたまふもなま憎くて(このように大将が夜遅くにお帰りになるのも嫉妬で反感して)、入りたまふをも聞く聞く(お帰りになった音を聞きながら)、寝たるやうにてもものしたまふなるべし(寝入ったようなふりをしていらっしゃるようでした)。

「\*妹と我といるさの山の(夫婦でさあこれから仲良くしようという時に)」 \*注に<夕霧の口ずさみ。「いもとあれと(妹と我と) いるさのやまの(入佐山の) やまあらぎ(山蘭) てなとりふれそ(手な取り触れそ) や かほまさるがに(顔優るがに) や とくまさるがに(疾く優るがに) や」 (催馬楽、妹と我) の一節。>とある。「いも(妹、婦)」は<男が女を親しんで言う語>と古語辞典にある。「入るさ」は<《「さ」は接尾語》月などのはいる時、または、はいる方角。いりがた。多くは歌枕「いるさの山」にかけて用いる。>とある。が、「いるさのやま(入佐山)」は<兵庫県北部、豊岡市出石(いずし)地区にある此隅山といわれるが不詳。いるさやま。[歌枕]>とのこと。「山蘭」は<コブシの古名>とのこと。また、「あらぎ」は<野蒜(ノビル、ネギ草)の古名>または<イチイ(低木)の古名>ともある。此処までは、夫婦で山に行楽にでも出かけたかの趣きでもあるが、「手な取り触れそ(手を触るな)」「顔優るがに(顔が赤くなるから)」「疾く優るがに(直ぐ赤くなるから)」というのは、コブシの実や花が猛毒なのではないのだから、このままの意味では歌意が汲めない。こういう時は多くの場合、使われた語は春歌の隠語だ。第一、「妹と我と入佐山の」は<夫婦が事に及ぶ時の>ということをも風情めかして洒落込んだ言い回しで、「あらぎ」は具体的な植物はさて置き<荒らぐ神聖>の語感が<女陰>を思わせる。それを直接手で玩ぶのは遊びごとで夫婦の情愛が込められた情事ではない、みたいな筋だろうか。しかし、「や」の合いの手は、この話題がそも酒宴での冗句である事を示していて、遊び人こそ気をつけよう、みtainな響きに聞こえる。

と、声はいとをかしようて(と声をととも浮かれ調子で)、独りごち歌ひて(誰に聞かせるでもなく歌って)、

「こは、など、かく鎖し固めたる(これはどうしてこんなに固く鍵を掛けたんだ)。あな、埋れや(全く息苦しい)。今宵の月を見ぬ里もありけり(今宵の名月を眺めない家もあるとは)」

と(と大将は)、うめきたまふ(閉口なさいます)。格子上げさせたまひて(格子戸を女房に上げさせ為さって)、御簾巻き上げなどしたまひて(御簾を巻き上げたりなさい)、端近く臥したまへり(縁側近くの廂に寝転びなさいました)。

「\*かかる夜の月に(こうした秋の美しい月夜に)、心やすく夢見る人は(気も付かずに呑気に夢見ている人が)、あるものか(居るとはね)。すこし出でたまへ(ちょっと出て来て月を見てみなさいな)。あな心憂(なんて無粋な)」 \*「かかる夜の月」とあるが、この章頭には「秋の夕べのものあはれなるに」(一段)とあってだけで、この日が中秋八月十五日あたりとは特定出来ないように思えるが、むしろ「秋の夕べのものあはれなるに」という言い方は<如何にも秋らしい風情の有る夕べ→中秋あたり>と読むべきらしい。

など聞こえたまへど(などと大将は夫人に呼び掛けなさいましたが)、心やましよううち思ひて(夫人は疑念が消えず不機嫌で)、聞き忍びたまふ(知らん顔を為さいます)。

君たちの(子供たちが)、いはけなく寝おびれたるけはひなど(あどけなく寝ぼけているようすが)、ここかしこにうちして(其処此処に少し見えて)、女房もさし混みて臥したる(添い寝の女房も混じって横になっている)、人気にぎははしきに(人の多く居る賑わしさに)、ありつる所のありさま(先程の寂れた一条宮邸の様子を)、思ひ合はするに、多く変はりたり(思い合わせれば大変な違いです)。

この笛をうち吹きたまひつつ(大将は御息所から譲られた故大納言の笛をお吹きになって)、

「いかに(どのように)、名残も(私が立ち去った後で)、眺めたまふらむ(宮はこの月夜を御覧になっているのだろう)。御琴どもは(あの弦楽器類は)、調べ変はらず遊びたまふらむかし(あの調弦のままで弾いていらっしゃるのだろうか)。御息所も、和琴の上手ぞかし(御息所も和琴の名手だった筈だ)」

など、思ひやりて臥したまへり(などと思いを馳せながらものに寄り掛かっていらっしやいました)。

「いかなれば、故君(どうして亡き藤君は)、ただおほかたの心ばへは(ただ表向きの体裁として)、やむごとなくもてなしきこえながら(宮を丁重にお持て成し申しただけで)、いと深きけしきなかりけむ(あまり深い愛情のある様子でなかったのだろう)」

と、それにつけても、いといぶかしうおぼゆ(と、それにつけても不思議に思います)。

「見劣りせむこそ(顔立ちが悪いとしたら)、いといとほしかるべけれ(そりゃ確かに期待外れだが、宮はそんなに器量が悪いのかな)。おほかたの世につけても(まあ何でも)、限りなく聞くことは(期待し過ぎると)、かならずさぞあるかし(必ず裏切られるもんだ)」

など思ふに(などと思えば)、わが御仲の(御自分の夫婦仲が)、うちけしきばみたる思ひやりもなく(恥じらいを見せる思春期の謎解きも無しに)、睦びそめたる年月のほどを数ふるに(幼少期から知り合って仲良く遊んでいた時以来の年月の長さを数えれば)、\*あはれに(謎解きに期待を膨らませるような恋ではなかったと、しみじみ感じられて)、いとかう\*押したちておごりならひたまへるも(自分と同様に夫人にしても、相手の事が全て分かっている気になっていて、本当にこのように聞き分けなく誘いを撥ね付けて我を張っていらっしゃるのも)、ことわりにおぼえたまひけり(無理は無い気がしなされたのです)。 \*「あはれに」と、作者はこの語をずいぶん便利に使うが、意味が通る現代語にするには斯くの如く多くの補語を要する。 \*「押したちておごりならひたまへる」夫人を、大将は生活感の塊で夢が無いと、男の開拓魂で難じているが、また、それはそれで分かる気もするが、傍目には素直な夫人の嫉妬反応こそ可愛らしい。いや、世の中は難しい。

[第六段 夢に柏木現れ出る]

すこし寝入りたまへる夢に(少し寝入りなされた夢に)、かの衛門督、ただありしさまの桂姿にて(あの故衛門督がまるで生前の部屋着姿で)、かたはらにみて(大将の枕脇に座って)、この笛を取りて見る(この笛を手にとって見ている)、夢のうちにも、亡き人の、わづらはしう(夢の中までも故人が笛の行き先を気にして)、この声を尋ねて来たる(追い掛けて来ている)、と思ふに(と思っている)、

「笛竹に 吹き寄る風の ことならば 末の世長き ねに伝へなむ (和歌 37-08)

「この笛は必ず我が子に伝えたい (意識 37-08)

\*注にく柏木の霊が詠んだ歌。「根」「音」、「世」「節(よ)」の掛詞。「竹」「根」「節(よ)」は縁語。「根」は子孫の意。「なむ」願望の終助詞。この笛をわが子(薫)に伝えたい、という主旨。>とある。「笛」または「笛竹」をお題に頂いた大喜利物の歌詠みだ。上手く出来上がったから歌詠みの場に仕立てたが、歌自体に情緒が有るでもなく、物語の運びとしては、別に歌を持ち出さずに普通の会話文で、例えば意識の通りの文だとしても、何の支障も無い。「ことならば」は<同じことなら=どうせなら>。「根」は<同根、同族>の意で、「根に伝へなむ」だけなら<兄弟に伝えたいものだ>だが、「末の世長き」とあるから<子々孫々に=我が子に>となって、是が大将には大いなる謎なのだろう。故衛門督には子が居ない筈、だからだ。いや、というよりも、大将には、六条院の若君が衛門督の子ではないのか、という疑念が有るからこそ、こういう夢を見る、と読むべきか。

思ふ方異にはべりき(託す人は別に居ります)」

と言ふを(とその夢枕の衛門督が言うのを)、問はむと思ふほどに(真意を問い質したいと思っている時に)、若君の寝おびれて泣きたまふ御声に(子供の寝ぼけて泣きなさる御声に)、覚めたまひぬ(大将は目覚めなさいました)。

この君いたく泣きたまひて(その子はひどく泣きなさって)、\*つだみなどしたまへば(乳戻しなどしなされたので)、乳母も起き騒ぎ(乳母も起き騒いで)、上も大殿油近く取り寄せさせたまで(母上の夫人も部屋灯りを近くに用意させ為さって)、耳挟みして(前髪を耳挟みして)、そそくりつくろひて(そそくさと授乳の態勢を取り繕って)、抱きてあたまへり(その赤子を抱き座していらっしやいました)。\*「つだみ」は<《「つ」は「つ(唾)」で、「たみ」は嘔吐の意の「たまい」と同語源か》乳児などが、一度飲んだ乳を吐くこと。>と大辞泉にある。赤ちゃんの乳戻し。赤ちゃんは背中をさすってげっぷさせてあげないと、自分で胃の空気を抜く筋力が足りなくて、乳ごと戻す。問題はそれが気管支に入って呼吸困難になることだ。などということを生児の親は先人から教わる。まあ、嘔吐は体調不良からも起こるので、その意味でも心配だが、どうやら、此処には乳児がいるらしい。

いとよく肥えて、\*つぶつぶとをかしげなる胸を開けて、乳などくくめたまふ(夫人は服の胸を開いて、とても良く張った丸くて美しい乳房を出して、赤子に乳を含めさせなさいます)。\*「つぶつぶ」は<まるまると肥えているさま。ふっくら。>と大辞泉にあるが、此処では前に「いとよく肥えて」とあり、「まるまると」であろうと「ふっくらと」であろうと<肥えているさま>は頂けない。と、大辞林に「円円」という漢字表記があり、「円ら(つぶら)」は<まるくて、かわいらしいさま。>とある。是は乳房のことで複数だから、「つぶつぶと」なのであって、その一つ一つは「まるまると」しているのではなく<丸い>のだ。

稚児もいとうつくしうおはする君なれば(稚児もとても可愛らしい男の子なので)、白くをかしげなるに(夫人の白い乳房を含んだ姿は微笑ましいが)、御乳は(おんちは、お乳は)いと\*かはらかなるを(さっぱり出ないのを)、\*心をやりて慰めたまふ(気休めにとあやしなさいます)。\*「かはらか」は古語辞典に於いても、この語としては意味説明が無く、「かわらか」と同語かという指摘があり、「かわらか」は<「乾く(かわく)」と同語源か>と補説があり<さわやかである。さっぱりしている。>と解説されている。此処では訳文に<(乳が)出ない>とあり、「乾き気味」みたいな解釈かと同調する。それが普通の日常表現なのだろうと思うしかないが、「かわらか」には<乾上がった>みたいな語感があって、幾らか違和感はある。また、そうなるのと、この稚児は生後何ヶ月なのか、乳の出が悪いのなら、そのために乳母が居そうなもんだが、今一事情が分からない。\*「心を遣る」は<心の憂さを晴らす。気晴らしをする。>と大辞泉にある。しかし、この場合は<気晴らし

をする>のは稚児で、夫人は稚児がそうなるように<気を遣って>いた、ということかも知れない。何れ、気持だけでも、ということではありそうだ。

\*男君も寄りおはして(夫の大將君も夫人の側へお寄りになって)、「いかなるぞ(子供はどんな具合だ)」などのたまふ(などとお聞きになります)。\*うちまきし散らしなどして(魔除散米で実際に米を撒き散らしたりして)、乱りがはしきに(乱雑な状態の部屋の様子に)、夢のあはれも紛れぬべし(夢に見た笛の行方についての疑念も忘れてしまいそうです)。\*「をとこぎみ」は閨での夫を指す言い方のようなので、此处は母屋の御簾内場面だろうか。子供たちや乳母や女房らは廂で雑魚寝していたように読んで来たが、愚図った子を乳母が母屋の夫人の許に抱いて来た、とでも思って置く。が、判然としないので母屋や帳台などの補語明示まではしない。よくあることだが、当時の生活様式を私が見知らない所為か、この手の呼称変化に場面変化の舞台背景が思い描けず、その唐突感に戸惑うばかりだ。場面変化があるらしいことは、それなりに興味深い、中身が分からないので楽しく読み進めるわけでもない。\*「うちまきし散らし」は注に<魔除の散米。国宝『源氏物語絵巻』「横笛」段にこの様子が描かれている。『完訳』は「ここでは、乳児のむずかるのを物の怪のせいとみての処置」と注す。>とある。「うちまきし」は動詞「打ち撒く」の連用形に動詞「す」が付いた<ざっと撒き散らすことをする>という一般動詞の連用中止の語用ではないらしい。是が一般誤用なら、「散らしなどし」は全くの重複文で変だし意味も不明だ。が、一見そう見えて、変な文だと思った。が、「打ち撒き」は名詞で<魔よけのために米をまき散らすこと。また、その米。散米(さんまい)。花米(はなしね)。>または<神前に供える米。>または<米をいう女房詞。>と大辞泉にあり、「打ち撒きし」で<魔除け散米をして>という言い方だと知った。是も風習を知らないと読めない典型、みたいな文。

「悩ましげにこそ見ゆれ(具合が悪そうです)。今めかしき御ありさまのほどにあくがれたまうて(あなたが今を盛りの若者気取りの御様子で外歩きなさって)、夜深き御月愛でに(夜更けのお月見に)、格子も上げられたれば(格子戸を上げ開けなされたので)、例のものけの入り来たるなめり(辺りにいつも紛れ居る物の怪が入り込んで来たんでしょよ)」

など(などと夫人は)、いと若くをかしき顔して(とても若々しく美しい顔で)、かこちたまへば(憎まれ口を利きなさるので)、うち笑ひて(大將は思わず笑って)、

「あやしの(これはとんだ)、ものけのしるべや(物の怪の道案内をしたもんだ)。まろ格子上げずは、道なくて(私が格子戸を上げなければ通れなくて)、げにえ入り来ざらまし(確かに物の怪は入って来られなかったんだらうよ)。あまたの人の親になりたまふまに(大勢の子の母親にお成りになると)、思ひいたり深くものをこそたまひなりにたれ(思慮深く立派なことを仰るようになったものだ)」

とて(と皮肉って)、うち見やりたまへるまみの(見直しなさる夫の目が)、いと恥づかしげなれば(嫉妬を見透かすようで、とても極まり悪いので)、さすがに物ものたまはで(夫人はそれ以上は抗弁なさらずに)、

「\*出でたまひね(離れて下さい)。見苦し(人前での夫婦の言い合いなど見っともない)」\*「出づ」とあるのは、夫人専用の帳台の外へ、ということだろうか。母屋の外へ、は言い過ぎにも思えるが、場面事情が分からない。取り敢えず、側から<離れる>で逃げる。

とて、明らかなる火影を(と言って明るい灯火を)、さすがに恥ぢたまへるさまも憎からず(さすがに恥ぢかしがりなさる様子も悪くない)。まことに(実際の所)、この君\*なづみて(この子は愚図って)、泣きむつかり明かしたまひつ(泣き難しがつたまま夜を明かしなされたのです)。 \* 「なづむ」は、ある様相が別の様相と混然一体となっている状態を示す語感で、それが<馴染んでいる>のか<どっちつかずで停滞している>のか<微妙に漂っている>のかは、観察者の意図や立場で違うのだろう。この子の場合<愚図っている>。